

日英の談話におけるほめ表現の語用論的分析

ーポジティブ・ポライトネスの重層性ー

進藤三雄

1. はじめに

近年、ビジネス、スポーツ、教育、医療等の分野における部下や選手の指導において、旧来の指示命令型の指導方法ではなく、相手の優れた面に焦点を当て、それを承認することで彼らの自信やモチベーションを高めるコーチング的技法が重要視されつつある。承認の代表的なコミュニケーション技法として「ほめ」が挙げられるが、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論によれば、「ほめ」は対象人物との距離を縮めることで互いの領域の共有を表現するポジティブ・ポライトネスに含まれる。英語圏では「ほめ」が社会的潤滑油(social lubricants)として機能し(Wolfson, 1983)、同時にほめ手とほめられる側の仲間意識を高める機能を持つとも言われている(Holmes, 1986)。一方で、一般的に日本人は英語話者に比べ「ほめ」の使用に関して比較的消極的であると言われている。その理由として、日本人は敬語や丁寧な表現の使用など、相手を遠くに置くことによって敬意や配慮を表現するネガティブ・ポライトネスの表明は得意とするが、相手をほめる点に関しては言語的にも文化的にも親和性が少ない点が挙げられている。今後ますます社会のグローバル化が進み多様な考え方をを持った人々が増える状況において、日本人が日本語だけでなく英語で意思疎通を図る機会も増えるであろうことを考えると、改めて日本語話者と英語話者の「ほめ」という言語行動の違いを理解しておくことは、互いの良好なコミュニケーションを実現するためにも、また異文化理解を深めるためにも有意義なことであると考えられる。

本研究では、日本語と英語のファンタジー映画を分析対象として取り上げ、Brown & Levinsonのポライトネス理論の枠組みを援用しながら、日本語話者と英語話者が相手をほめる際の言語的特徴を比較・分析する。分析方法としてまず、日英の「ほめ」の使用頻度を比較し、「ほめ」が他のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである、感謝・呼び掛け語・バックトラッキング(繰り返し)・ユーモアとどの程度共起しているかを調べることで、英語話者がコミュニケーションにおいてどのように重層的にポジティブ・ポライトネスを表現しているかを検証する。

2. ポライトネスとは

社会学者アーヴィング・ゴッフマン(2014)は、人の基本的欲求にはポジティブ・フェイス(positive face)とネガティブ・フェイス(negative face)という2種類のフェイス(面目)があると考えた。ポジティブ・フェイスは「他人に認められたい・よく思われたい・賞賛されたい」という積極的欲求であり、ネガティブ・フェイスは、「自分の行動が他者に邪魔されたくない・干渉されたくない」といった欲求で、自分の領域(テリトリー)を侵害されたくないという消極的欲求である。我々はコミュニケーションをとる場合、常に自分と相手のこの二つのフェイスに気を配りながらその場の状況に応じた適切な言語表現を選び、円滑な対人関係を保とうと努めている。

Brown & Levinson (1987)は、ゴッフマンのフェイスの概念を基に、ポライトネス(対人関係を円滑にするための言語的配慮)にはポジティブなもの(positive politeness)とネガティブなもの(negative politeness)があるとするポライトネス理論を提案した。ポジティブ・ポライトネス(positive politeness)とは、周囲から認められたいというポジティブ・フェイスに働きかけ、積極的に相手の領域に踏み込み、相手のフェイス侵害行為を軽減するものであり、一方ネガティブ・ポライトネス(negative politeness)は、相手に脅かされたくないというネガティブ・フェイスに働きかけ、それを実現するために相手の領域を侵害しないよう努める言語行為である。言い換えると、ポジティブ・ポライトネスは相手との距離を縮め、連帯感、もしくは仲間意識を表現するポライトネスであり、ネガティブ・ポライトネスは相手に対する尊敬、もしくは相手との距離を保つことによるポライトネスであるといえる。

典型的なポジティブ・ポライトネスのストラテジーとしては、相手をほめる、一致や共感できる点を見いだす、相手の小さな変化に気づく、愛称や内輪言葉を使う、冗談(ユーモア)を言うなどが挙げられる。つまり、話し手と聞き手の共通基盤を主張することがポジティブ・ポライトネスの一般的な性質であり、会話者同士が同じグループに所属していることを表現することにより、フェイス侵害行為の危険性を減少させようとするものである。一方、他者に邪魔されたくない、自分の領域や縄張りに踏み込まれたくないといった欲求に配慮するネガティブ・ポライトネスの典型的ストラテジーには、謝罪、依頼等における間接的表現、控えめな表現、敬語や敬称の使用などが含まれる。つまり、相手の領域に踏み込むことや直接名指しすることを避けるような遠隔化表現と間接的表現によって、相手との距離を取り、事柄に直接触れないようにする敬避的表現を特徴とする(滝浦, 2015)。

3. 調査方法

3.1. 「ほめ」の射程範囲

ほめ行為は基本的に、はげまし・なぐさめ・挨拶などの言語行為や、アイコンタクト・笑顔等の非言語行為を含む承認行動のひとつとして考えられ、マズロー(1987)の提案する「欲求5段階説」における承認欲求の、「他者からの評価に対する欲求」を満たす重要なコミュニケーションスキルである。広辞苑によれば、ほめるとは「物事を評価し、よしとしてその気持を表す。たたえる。賞讃する。」と定義されている。しかし、実際のほめ表現には様々な種類のものがある。林(2002)は、言語ストラテジーの観点から「ほめ」を分類し、素直に相手をほめる「純粋ほめ」、

儀礼的にほめる「挨拶ほめ」、コミュニケーション・ストラテジーの一つとしての「方略ほめ」を挙げている。「方略ほめ」とは、例えば相手をおだてて何かをさせたり、良い点を指摘しながら相手の改善点を指摘したり、人間関係を修復するためにほめたりする場合などで、本来の純粋な「ほめ」とは違う機能を有しているものを指し、その中に「皮肉ほめ」も含まれている。

本研究ではほめ表現をまず、「純粋ほめ」「形式ほめ」「感謝ほめ」「皮肉ほめ」に分類し調査・分析を進めることにする。「純粋ほめ」とは素直に相手をほめることであり、その中にはほめる根拠を詳しく明言したものから、「さすが!」「Great!」などのように一語で表現する場合も含まれる。「形式ほめ」は純粋に相手を評価するというよりは、相手との関係を良好に保つことを意図して行われるものである。例えば、相手に対して依頼・命令・批判などをする時、その前後に形式的に相手をほめたり、おだてたりする場合である。「形式ほめ」の表現方法などについては「純粋ほめ」と共通するところが多く、ほめの一つの種類として論ずるのが適当であるという金(2012)の考えに従って本研究でも「ほめ」に含めることとする。感謝を「ほめ」として認定するかどうかは議論の分かれるところである。感謝と「ほめ」の違いについて金(2012)は、感謝は相手の言動に対するありがたい気持ちを述べる行為であるため、感謝が行われるべき場面に行われないと会話者同士の関係に何らかの支障をきたす可能性があるが、ほめ行為は相手との関係において必ずしも不可欠な行動とは言えない点を指摘している。しかし一方で、感謝も称賛すべき相手の言動に対する肯定的フィードバックと捉えるならば、青木(2012: 85)も指摘しているように「ほめ」の作用域に含まれると考えられる。また大野(2010)も、感謝といった言語行動には、「ほめ」という言語行動と重なる部分があると指摘し、更に感謝には評価語を含んだ「ほめ」に近い感謝と評価語を含まない単なる感謝があり、「評価語の有無」という形式上の客観的基準から両者を区別している。本研究では評価語を含まない単なる「ありがとう」のような単純な儀礼的・習慣的な感謝は「ほめ」に含めず、「部屋をきれいにしてくれてありがとう」のように相手の称賛すべき行為や評価語が含まれている感謝を「感謝ほめ」として「ほめ」の範囲に入れて分析対象とする。

以上をまとめると、「ほめ」の射程範囲に含める表現は、「純粋ほめ」「形式ほめ」「感謝ほめ」の3つであり、これらをまとめて「実質ほめ」と呼ぶことにする。一方、「皮肉ほめ」は、表面的にはポジティブな評価語を使ったほめ形態を取るが、コンテキストや音声的特徴から実際には「遠まわしに意地わるく相手の弱点などをつくこと」(広辞苑による皮肉の定義)であり、実質的に相手をほめていることには当たらないため、今回の分析対象からは外し、「実質ほめ」のみを分析対象とする。本研究での「ほめ」に関する分類を図1に示す。

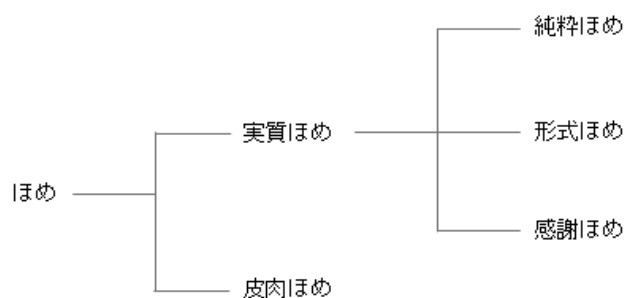


図1 ほめの分類

3.2. 分析方法

本研究では、「ほめ」の出現数の日英差にまず注目し、英語話者と日本語話者が談話の中でどの程度ほめ表現を頻繁に使用しているかを比較する。また、実質ほめのうち形式ほめと感謝ほめの占める割合に日英差があるかどうかを検証する。更に、一般的に英語話者は日本人に比べ、「ほめ」を含めたポジティブ・ポライトネスを積極的に使用する傾向があると言われているが、実際に英語話者がほめ表現と他のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーをどの程度重層的に使用しているかも検証する。今回の調査では特に Brown & Levinson (1987)の指摘するポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの中の、呼び掛け語・バックトラッキング（繰り返し）・ユーモアに焦点を当て、それらがどの程度の頻度でほめ表現と共起しているかを分析する。なお、呼び掛け語・バックトラッキング・ユーモアの出現数は日英の実質ほめの総数の違いに影響を受ける可能性があるため、比較データは各ストラテジーが実質ほめに占める割合を基本として、それぞれ *t* 検定を実施する。

3.3. 調査対象素材

今回の調査対象として、日英のファンタジー・アニメ映画を素材として選んだ。日本語版アニメとしてはジブリ映画から6作品を、英語版としてはディズニー映画から6作品の計12作品を選び、会話部分をテキストデータ化した。作品の選定に際しては発話者として出来るだけ人間が多く登場する作品を選び、また映画のジャンルをファンタジー映画に統一することで日英のデータにおける等質性を確保した。表1は調査対象の作品名と各作品の放映時間を示している。

表1 調査対象作品名と各放映時間

	作品名	放映時間（分）
日本語アニメ（英題）	千と千尋の神隠し (<i>Spirited Away</i>)	124
	となりのトトロ (<i>My Neighbor Totoro</i>)	100
	魔女の宅急便 (<i>Kiki's Delivery Service</i>)	103
	天空の城ラピュタ (<i>Laputa: Castle in the Sky</i>)	126
	風の谷のナウシカ (<i>Nausicaa of the Valley of the Wind</i>)	116
	もののけ姫 (<i>Princess Mononoke</i>)	133
	合計	702
英語アニメ（邦題）	<i>Tangled</i> (塔の上のラプンツェル)	101
	<i>Frozen</i> (アナと雪の女王)	102
	<i>Beauty and the Beast</i> (美女と野獣)	130
	<i>Up</i> (カールおじさんの空飛ぶ家)	96
	<i>Brave</i> (メリダとおそろしの森)	94
	<i>Ratatouille</i> (レミーの美味しいレストラン)	111
	合計	634

各作品の平均放映時間は、日本語アニメが 117 分であり、英語アニメは 106 分であった。日英の映画の放映時間の平均に差があるかどうか検定をおこなった結果、有意な差は見られなかったため ($t=1.481$, $df=10$, n.s.)、日英 2 つのグループそれぞれの放映時間に関する平均はほぼ等しいと見なし、比較対象として妥当であると判断した。次にこれらの作品の中からほめ表現を含む部分を抽出し、分析用のデータ資料を作成した。ほめ表現の認定に際して、面前にいない人について言及されたほめ表現は、ほめの対象となる人物に何ら心理的影響を及ぼさないことから、単に会話中の話題に過ぎないと判断して「ほめ」とは認定しなかった。但し、相手への発言が相手の家族やそれに類する者に関する「ほめ」であった場合には、相手の内なる領域について肯定的な言及が為されたとみなし「ほめ」に加えた。また「ほめ」の対象者が直接会話に加わっていない場合でも、その人がほめ発言を聞ける場に同席し、話し手も対象者がそのほめ発言を聞いていることを認識している場合には「ほめ」として認めた。調査対象の作品の中には挿入歌や登場人物のモノローグが入っているものがあるが、それらに含まれるほめ表現も面前の聞き手に対する直接的な「ほめ」ではないと判断し、分析対象から外した。

4. 分析結果と考察

4.1. 日英の実質ほめと純粋ほめの使用頻度

表 2 は日本語アニメと英語アニメにおける実質ほめ（純粋ほめ＋形式ほめ＋感謝ほめ）と純粋ほめの出現数、及び純粋ほめの実質ほめに占める割合を示したものである。実質ほめの出現数の合計は、日本語版が 184 例、英語版が 349 例であった。また純粋ほめのみでの出現数の合計は、日本語版が 138 例、英語版が 318 例であった。実質ほめに占める純粋ほめ出現率は、日本語版が 75.0%であり、英語版が 91.7%であった。以上のことから、英語では純粋に相手をほめる表現が多く使われ、日本語では純粋な「ほめ」以外にも形式的な「ほめ」や感謝を含んだ「ほめ」も全体の 4 分の 1 程度使われていることがわかる。

表 2 実質ほめと純粋ほめの出現総数と実質ほめにおける純粋ほめの出現比率

	実質ほめ出現数	純粋ほめ出現数	純粋ほめの比率
日本語アニメ(N=6)	184	138	75.0%
英語アニメ(N=6)	349	318	91.7%
合計	533	456	83.5%

日英間で実質ほめの出現数の平均に差があるかどうかについて検定を行ったところ、有意差が見られた ($t=3.838$, $df=7.5$, $p<.01$)。この結果と表 3 に示されている平均値から判断すると、英語の実質的なほめ行為は日本語のそれに比べ、約 1.9 倍の頻度で発生しているといえる。また感謝ほめと形式ほめを除いた純粋ほめだけに注目して比較をすると、平均値において更に有意差が認められ、英語では日本語の約 2.4 倍の頻度でほめ行為が使われていることが確認できた ($t=4.790$, $df=10$, $p<.01$)。

表3 実質ほめ（純粹ほめ＋形式ほめ＋感謝ほめ）と純粹ほめの平均出現数

	実質ほめ		純粹ほめ	
	平均値	SD	平均値	SD
日本語アニメ (N=6)	30.7	8.017	23.0	7.483
英語アニメ (N=6)	58.2	15.613	55.7	14.935

4.2. 「ほめ」と他のポライトネスの共起

図2は日英の実質ほめにおける、形式ほめ、感謝ほめ、文頭呼び掛け、文尾呼び掛け、バックトラッキング、ユーモアのそれぞれの出現数を示したものである。文頭呼び掛け、文尾呼び掛け、バックトラッキング、ユーモアに関しては、ほめ表現と同時に別のポジティブ・ポライトネスを表す表現が共起している数と見ることができる。母数となる日英の実質ほめのケース数に違いがあるので、これ以降は日英の実質ほめにおける各項目の占める平均の割合を比較することで、形式ほめ、感謝ほめ、その他のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが日英でどの程度の割合で重層的に発生しているか比較・検討する。

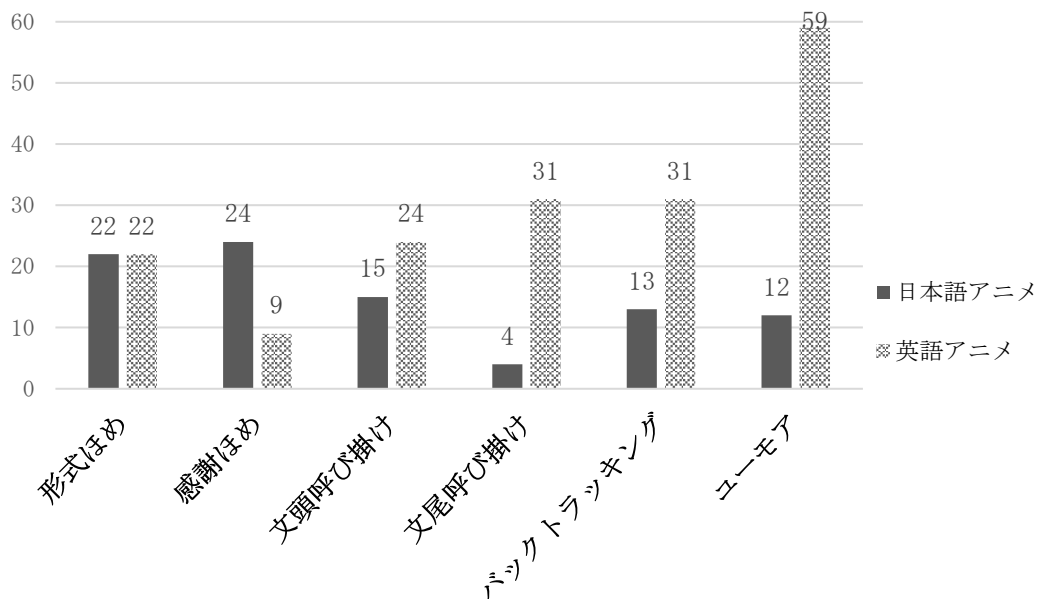


図2 日英の実質ほめにおける各項目の出現数

4.3. 形式ほめ

表4は実質ほめにおける形式ほめと感謝ほめの出現率の日英比較を表したものである。ここでの形式ほめとは、依頼・命令・批判など相手のフェイスを侵害する危険性がある発言と共に使われるほめ行為であり、形式ほめを使うことで相手のネガティブ・フェイスを侵害する行為を和らげる試みととらえる。次の会話例は、その場に残ろうとするナウシカに対して、アスベルがナウシカの能力をまずほめてから、その後に依頼を行う場面である。

ナウシカ： だめよ、私も残る。身代わりになってくれた子や母様をほつては行けないわ。

アスベル： 谷の人を救えるのは君だけだ。頼む、行ってくれ。ぼくらのために行ってくれ。(以後会話例の下線は筆者による)

(風の谷のナウシカ)

次の発話は、ねずみの Remy とその仲間がレストランの食料庫から食べ物を盗んでいるところを、友人の Linguini が発見したときの発言であるが、相手を友人として信頼していたという肯定的評価を過去形で示した後に命令文が続くケースである。ここでは純粋な「ほめ」とは異なり、本来の「命令」という言語行為を遂行するために、補助的・形式的な「ほめ」が使われている。

LINGUINI What's going on? You're stealing from me? How could you? I thought you were my friend, I trusted you! Get out! You and all your rat buddies! And don't come back!

(Ratatouille)

形式ほめの平均値を比較すると日本語の方の出現率が高い傾向にはあるが、作品間で出現数にばらつきがあるため、日英間での有意差は認められなかった ($t=1.16$, $df=10$, n.s.)。

表 4 実質ほめにおける形式ほめと感謝ほめの平均出現率

	形式ほめ	<i>SD</i>	感謝ほめ	<i>SD</i>
日本語アニメ ($N=6$)	11.2%	9.986	15.7%	9.623
英語アニメ ($N=6$)	5.9%	5.092	2.5%	2.108

4.4. 感謝ほめ

感謝ほめは、単なる「ありがとう」だけでなく、その前後に感謝の根拠となる相手の行為や評価語が述べられたものである。例えば次の会話では、トキがアシタカに向かって自分の夫を助けてくれたことに対して感謝した後、相手の行為に対してポジティブな感情的評価を示している。

トキ： ありがとう。あんな亭主でも助けてくれて嬉しいよ。

アシタカ： よかった。連れてきてはいけなかったのかと心配してしまった。

(もののけ姫)

次の例では、Beast が魔法の鏡を Belle に渡し病気の父親の元に帰ることを許可するシーンであるが、Belle はその行為に感謝をした後に相手の思いやりを評価している。

BEAST: Take it with you, so you'll always have a way to look back,
and remember me.

BELLE: Thank you for understanding how much he needs me.

(*Beauty and the Beast*)

日英で実質ほめにおける感謝ほめの出現率に差があるかどうか検定を行ったところ、有意差が見られた ($t=3.284$, $df=10$, $p<.01$)。この結果と表4の平均値を見ると、感謝ほめにおいては英語より日本語での使用頻度が高いことがわかる。これは先の純粹ほめの使用頻度とは対照的で、「ほめ」の使用頻度において日英に逆転が見られる。つまり、日本語話者は英語話者ほど純粹ほめの使用頻度は高くはないが、ほめ表現と共に感謝の気持ちも表明する機会が多いことを示している。このことは、日本人が相手から受けた恩恵に対して、数週間後でも「先日はたいそうおいしいお土産をいただき、有難うございます」などと過去における相手の好意的言動に対して再度謝辞を含めた言及をすることが一般的であるのに対して、英語話者はそのような言語習慣は希薄であり、好意を受けたその場で一度感謝を述べた後は、後日相手に会った時にそのことを話題として持ち出すことは少ないという文化的な違いとも関連していると考えられる。

4.5. 呼び掛け語

Brown & Levinson (1987: 103)の指摘するポジティブ・ポライトネス・ストラテジーのひとつに“Use in-group identity marker” (仲間であることを示す標識を使い)があり、親しい呼び掛け語・仲間言葉や方言・業界用語・俗語・言葉の省略などを具体例として挙げている。この中の呼び掛け語(address terms)は、話しの相手に言及することばの総称である対称詞のうちの呼格的用法(vocative use)と呼ばれているもので、相手の注意を引きたいときや、相手に感情的に訴えたい場合などに用いる(鈴木, 1973: 146)。またウィリアムズ(2002: 103)は、呼び掛け語に関して、法構造に影響を及ぼすものではないが対人関係的意味において情報発信者と受信者の対人関係の特性を合図する重要な機能を有すると指摘している。英語の仲間意識を示す呼び掛け語としては、相手のファーストネームや, *mate*, *buddy*, *pal*, *honey*, *dear*, *blondie*, *brother*, *cutie*, *sweetheart*, *guys* などがある。一方で、呼び掛け語には相手に敬意を示すために使われるものがあり、日本語では「～様」「～殿」「閣下」などが、英語では *sir*, *madam*, *Your majesty* などがある。これらの敬意を示す呼び掛け語は、相手との距離を取ることで相手へのフェイス侵害行為を補償するネガティブ・ポライトネスに当たるため、今回の分析対象から除外した。以下に談話中で仲間意識を示す呼び掛け語が使われている例を挙げる。

湯婆婆 セーン！よくやったね、大もうけだよ！

(千と千尋の神隠し)

LORD Well done, lad! Well done!

DINGWALL:

(*Brave*)

このように **first name** や親しい呼び掛け語は、聞き手との距離を縮める機能を果たすポジティブ・ポライトネス・ストラテジーのひとつであるが、ポジティブ・ポライトネスの重層性を見る観点から、どのくらいの頻度でほめ表現の中で呼び掛け語が共起するかを調べてみた。表5は呼び掛け語がほめ表現の文頭で使われている場合と文尾で使われている場合のそれぞれの実質ほめに占める割合を示したものである。平均比率からわかるように、日英間で文頭での呼び掛け語の出現率に大きな違いはなく、有意差は見られなかったものの ($t=.130$, $df=6.528$, $n.s.$)、文尾での出現率に関しては日英で有意な差が認められ ($t=-3.445$, $df=10$, $p<.01$)、文尾においては英語での使用頻度が日本語よりも高く、日本語の使用頻度は非常に少ないことが確認できた。

表5 「ほめ」における呼び掛け語の出現比率

	文頭呼び掛け語比率		文尾呼び掛け語比率	
	平均値	<i>SD</i>	平均値	<i>SD</i>
日本語アニメ ($N=6$)	7.4%	7.948	2.6%	2.297
英語アニメ ($N=6$)	7.0%	3.144	9.4%	4.260

4.6. バックトラッキング（繰り返し）

聞き手との共通基盤を主張する特徴的手段は、相手と一致する部分を強調することである。共通する話題は話し手と聞き手の **rapport-inspiring topics**（信頼関係を引き起こすトピック）となり、初対面の相手と相対するような場面でよく持ち出されるという（Brown & Levinson, 1987: 112）。そのひとつの方策である **repetition**（繰り返し）は、コーチングやカウンセリングの世界ではバックトラッキングとカリフレインと呼ばれているものであり、相手の直前の発言の一部を繰り返すことで話題を共有し、聞き手との共通基盤を強めることを可能にする重要なコミュニケーションスキルである。基本的に繰り返す内容は相手の発言の一部であるが、場合によっては相手の発言を要約したり事実だけでなく相手の感情表現を繰り返したりする場合もある。コーチやカウンセラーは傾聴を基本としたコミュニケーションスタイルを重視するが、バックトラッキング（繰り返し）を適切に使用することでクライアントとの信頼関係を早く構築することが可能になると考えられている。つまり相手の発言の一部を繰り返すことで、常に相手の発言に注意を向けている（傾聴している）というメッセージを相手側に伝えることになり、結果的に互いの心理的距離が縮まることにつながる。バックトラッキングをされる側からすると、聞き手が常に正しく自分の発言を傾聴してくれているという安心感を得ることができるわけで、更に積極的に話を続けようとする動機にもつながる。以上のことから、バックトラッキングは、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの範疇に入れることができる。バックトラッキングの談話例として次のような例が挙げられる。

A: John went to London this weekend!

B: To London!

(Brown & Levinson, 1987: 113)

A: I had a flat tyre on the way home.

B: Oh God, a flat tyre!

(Brown & Levinson, 1987: 113)

次の会話例は、キキが自分の仕事に関してネガティブな発言をした後に、トンボがその発言に対してポジティブな側面から彼女の仕事を再評価し、その結果キキが自信を取り戻し元気になっていく場面である。

トンボ あーあ。僕も魔女の家に生まれればよかった。キキなんかホーキで
 ツィーだけどさ。僕なんかコレだもん。フフフ....
キキ: 私のは仕事だもん。楽しいばかりじゃないわ。
トンボ: そうかな。才能をいかした仕事だろ。ステキだよ。
キキ: 私 ちょっと自信をなくしてたの。でも今日 ここへ来てよかった。
 海を見てると元気になれそう。

(魔女の宅急便)

次の会話は、雪だるまの Oraf が体の冷え切った Anna を助けるために暖炉で部屋を暖めるシーンであるが、Oraf は自分が溶けて無くなっても構わないくらい Anna の存在価値を高く評価している。

ANNA Olaf, you're melting.

OLAF Some people are worth melting for.

(Frozen)

表 6 は日英の映画の中で、「ほめ」に占めるバックトラッキングの平均出現率を示したものである。平均値にはそれ程大きな差は見られず、検定の結果でも有意差は見られなかった ($t=-.482$, $df=7.35$, n.s.)。このことから、日本語と英語の会話においてバックトラッキングの使用頻度にそれほど大きな違いは無いといえる。

表6 「ほめ」におけるバックトラッキング出現比率

	平均値	SD
日本語アニメ (N=6)	7.5%	3.024
英語アニメ (N=6)	8.8%	6.052

4.7. ユーモア

Brown & Levinson (1987: 124) では、joke (冗談) は会話者同士が共有する知識や価値観を背景としながら、それらを強調することで聞き手を“くつろいだ気分”にさせ、結果的にフェイス侵害行為を軽減する働きがあると述べている。また滝浦 (2015: 14) は、冗談が“本当”や“真面目”と対立する種類の言葉であることを考えるなら、冗談を言える間柄とは、“本当”のことを“真面目”に言わなくても人間関係にひびが入ったりしないくらい近しい関係のことだと指摘する。つまり、冗談やユーモアのある表現を使うことは相手との距離が近いことを示唆することにつながり、更にその距離を縮める機能を有すると考えられることから、ポジティブ・ポライトネスを表現する方法であるといえる。

次の会話例では、酔っ払いの老人 Shorty が “a tall drink of water” (魅力的な人) というポジティブなメタファーを使って魔女 Gothel を美しいと評価するシーンである。このようにユーモアには比喻表現がよく使われることがあるが、それは比喻という技法が対比・転換の言語的操作によって表現の具体化をはかるものであり(半沢, 1989: 150)、その意味のずれが笑いを生むことにつながるからであると考えられる。また、ここでのメタファーには俗語表現が使われており、それは 4.5. で述べた “Use in-group identity marker” のひとつに相当することから、このほめ表現にはユーモアと俗語使用といったポジティブ・ポライトネスの重層性が見られることを指摘しておきたい。

SHORTY: Oh, somebody get me a glass. Because I just found me a tall drink of water.

GOTHEL: Oh, stop it you big lug. A-ha-ha-ha-ha.

(Tangled)

表 7 は、日英のほめ表現の中でどの程度の割合でユーモアが出現したかを示したものである。平均値において、ほめ表現内でユーモアを含むものは日本語では全体の 7.1%であり、英語では 17.5%であった。このことから英語の方が日本語に比べ 2.5 倍の高い比率でユーモアを含むほめ表現が使われていることになる。また検定でも日英間のユーモア使用比率の平均に有意差が確認された ($t=2.872$, $df=6.398$, $p<.05$)。一般的に英語話者は日本語話者に比べユーモアの使用を好むと言われてはいるが、ほめ行為内においてもその傾向が確認され、英語ではユーモアが「ほめ」のポジティブ・ポライトネスを強化する重要な機能を担っているといえる。

表7 「ほめ」におけるユーモア出現比率

	平均値	SD
日本語アニメ (N=6)	7.1%	3.138
英語アニメ (N=6)	17.5%	8.307

次の会話例では、パリのレストランで働く Linguini の指導役である女性料理人 Colette が、その厨房で働く全員が単なる料理人ではなく芸術家でもあり海賊でもあると形容し、“we”という主語を使うことで Linguini もその仲間に含まれることを示唆している場面である。それに対し、Linguini が確認のために“We?”とバックトラッキングで聞き返すと、Colette は英語の“we”と発音が近似する母語である仏語の“Oui”で肯定する。そして彼女は Linguini をすでにチームの一員であるとはめて、更に文尾で“oui?”と上昇調のイントネーションで聞き手に同意を求める。それに対して Linguini は仏語の“Oue”で同意した後に「感謝ほめ」を表明する。この会話のやり取りでは英語と仏語の語呂合わせに近い言語の詩的機能（ヤコブソン:1984）を使うことでユーモアが生まれ、二人の間に恋愛意識が生まれるきっかけになっている。この一連の談話では、相手を仲間であると認める「ほめ」に加え、バックトラッキングを巧みに使うことでユーモアが生まれ、更に Brown & Levinson (1987: 127)の主張するもうひとつのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである「包括的“we”」を使い会話者間に協力的関係が築かれることで、ポジティブ・ポライトネスが重層的に表現されているといえる。

COLETTE So you see, we are artists, pirates. More than cooks are we.

LINGUINI We?

COLETTE Oui. You are one of us now, oui?

LINGUINI Oui. Thank you, by the way, for all the advice about cooking.

COLETTE Thank you, too.

LINGUINI For what?

COLETTE For taking it.

(*Ratatouille*)

5. まとめ

本研究では、ファンタジーにおける日本アニメ映画と英語アニメ映画の談話の中で、「ほめ」が他のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとどのように重層的に共起しているかを調べた。その結果、まず全体像として「ほめ」は英語の方が日本語よりも実質ほめに関しては約 1.9 倍、形式ほめと感謝ほめを除いた純粋ほめに関しては約 2.5 倍の頻度で出現していることがわかった。このことから、英語話者は日本語話者より談話中において「ほめ」を積極的に使用することでポジティブ・ポライトネスを表現しようとする傾向が強いことが再確認できた。日本語において「ほめ」が少ない理由として山口 (2015: 138) が述べているように、日本語の「ほめ」は、社会的力関係において上から下へ行われる場合が多く、下から上への「ほめ」は失礼と捉えられてしまう場合が多いことも指摘しておきたい。

実質ほめの中に占める形式ほめの比率については、日英間において有意な差は見られなかった。このことから話し手から聞き手へ依頼・命令・批判などする場合、その前後に形式的に「ほめ」を加えることで聞き手のフェイスを侵害する危険を和らげようとする言語方策は、日英で共通した傾向であるといえる。一方で実質ほめにおける感謝ほめの出現比率に関しては、英語より日本

語の方が多かった。感謝もポジティブ・ポライトネスの一部であることを考えると、日本人はほめる際に感謝をより柔軟に使うことで相手のポジティブ・フェイスを補償することを得意としていると考えられる。

呼び掛け語と「ほめ」の共起については、「ほめ」の文頭に呼び掛け語が使われる場合では日英で有意な差は認められなかったが、文尾においては英語の出現率が有意に高かった。文頭の呼び掛け語は、相手の注意を引く機能を有しているためコミュニケーション上必須要素の場合がある反面、文尾における呼び掛け語は、親しみや愛情を表現する手段としてその使用はある程度任意であることを考えると、英語の方が文尾での呼び掛け語を通してより積極的にポジティブ・ポライトネスを表明しているといえる。

バックトラッキング（繰り返し）は、相手の発言の一部を繰り返すことで信頼関係を引き起こすことにつながるが、「ほめ」におけるバックトラッキングの使用頻度に日英で有意な差は認められなかった。

日英の「ほめ」におけるユーモアの共起については、英語は日本語の 2.5 倍の頻度で談話中にユーモアが出現していることが確認できた。これはディズニー映画にはミュージカル仕立てのものも含まれ（*“Tangled”*, *“Frozen”*, *“Beauty and the Beast”*）、また「愛」や「友情」といったソフトなテーマを中心に上げながら全体的にエンターテインメントを重視した作品作りになっている一方で、ジブリ映画は、「環境問題」や「若者の自立」などのより社会性の強いテーマを作品の中心に据えていることも影響していると考えられる。しかし同時に、日米を代表する同じジャンルのファンタジー映画の作風の違いの中に、英語話者がユーモアを会話の中に取り入れ、場を和ませることで聞き手との距離を縮めようとする積極的姿勢が反映されているともいえる。

以上のことから、日本語においては感謝ほめの多さが特徴的に認められ、英語においては「ほめ」の使用の多さと同時に文尾での呼び掛け語やユーモアといったポジティブ・ポライトネスの重層性が強く認められた。堀（2006）は「好ましい対人関係」の築き方にはそれぞれの文化による差があるが、それが言語使用に如実に反映しているからこそ、英語教育では明確な意図をもって意識的にポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを指導する必要があると提言している。更にグローバル化が進む状況の中で日本における異文化教育や英語教育を考えるとときに、「ほめ」の積極的使用のみならず、それと共起する他のポジティブ・ポライトネスの重層性も視野に入れたコミュニケーション教育のあり方が求められる。

参考文献

- 青木直子 (2012) 「「ほめられる」と「ほめる」」速水敏彦 監修 『コンピテンス—個人の発達とよりよい社会形成のために』 ナカニシヤ出版, pp. 81-89.
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press. (Brown, P. & Levinson, S. C. 田中典子(監訳) (2011) 『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』 研究社)
- 福田浩子 (2001) 『英語の作法 やって良いこと・悪いこと』 講談社^{パワイングリッシュ}
- ゴッフマン, E. (2014) 『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学』 浅野敏夫訳 法政大学出版局
- 半沢 幹 (1989) 「文章の技法」 『講座日本語と日本語教育』 第5巻日本語の文法・文体 (下) 宮地 裕他編, 明治書院
- 林 伸一 (2002) 「「ほめる・ほめられる」教育—ほめる対象、方向、範囲、内容、動機、効果などの分類試案—」 中国四国教育学会教育研究紀要, 48, 374-379.
- Holmes, J. (1986) Compliments and compliment response in New Zealand English. *Anthropological Linguistics*. 28, 485-508.
- 堀素子他 (2006) 「日本の英語教育への提言」 『ポライトネスと英語教育』 ひつじ書房
- ヤコブソン, R. (1984) 『言語とメタ言語』 勁草書房
- 金 庚芬 (2012) 『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対象研究』 ひつじ書房
- 小玉安恵 (1996) 「対談インタビューにおけるほめの機能(1)-会話者の役割とほめの談話における位置という観点から-」 『日本語学』 15, 明治書院 pp. 59-67.
- 小玉安恵 (1993) 「ほめ言葉にみる日米の社会文化的価値：外見のトピックを中心に」 『言語文化と日本語教育』 6, お茶の水女子大学 pp. 22-35.
- 新村 出 (編) (1995) 『広辞苑第4版 (CD-ROM版)』 岩波書店
- マズロー, A.H. (1987) 『人間性の心理学』 産能大出版部
- 村田泰美 (2006) 「高校のオーラル・テキストに見られるポジティブ・ポライトネス」 堀素子他 『ポライトネスと英語教育』 ひつじ書房 pp.145-160.
- 大野敬代 (2010) 「日本語談話における「働きかけ」と「わきまえ」の研究」—目上に対する「ほめ」と「謙遜」の分析を中心に— 早稲田大学大学院教育学研究科博士学位申請論文
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店
- 滝浦真人 (2015) 『ポライトネス入門』 研究社
- ウィリアムズ, G. (2002) 『機能文法入門』 リーベル出版
- Wolfson, N. (1983) An empirically based analysis of complimenting in American English. In Wolfson, N & Judd, E eds. *Sociolinguistics and Language Acquisition*. Newbery House.
- 山口和代 (2015) 「留学生の「ほめ」にみられる社会・文化的価値観の影響」 南山大学紀要『アカデミア』 人文・自然科学編 第10号, pp. 137-150.